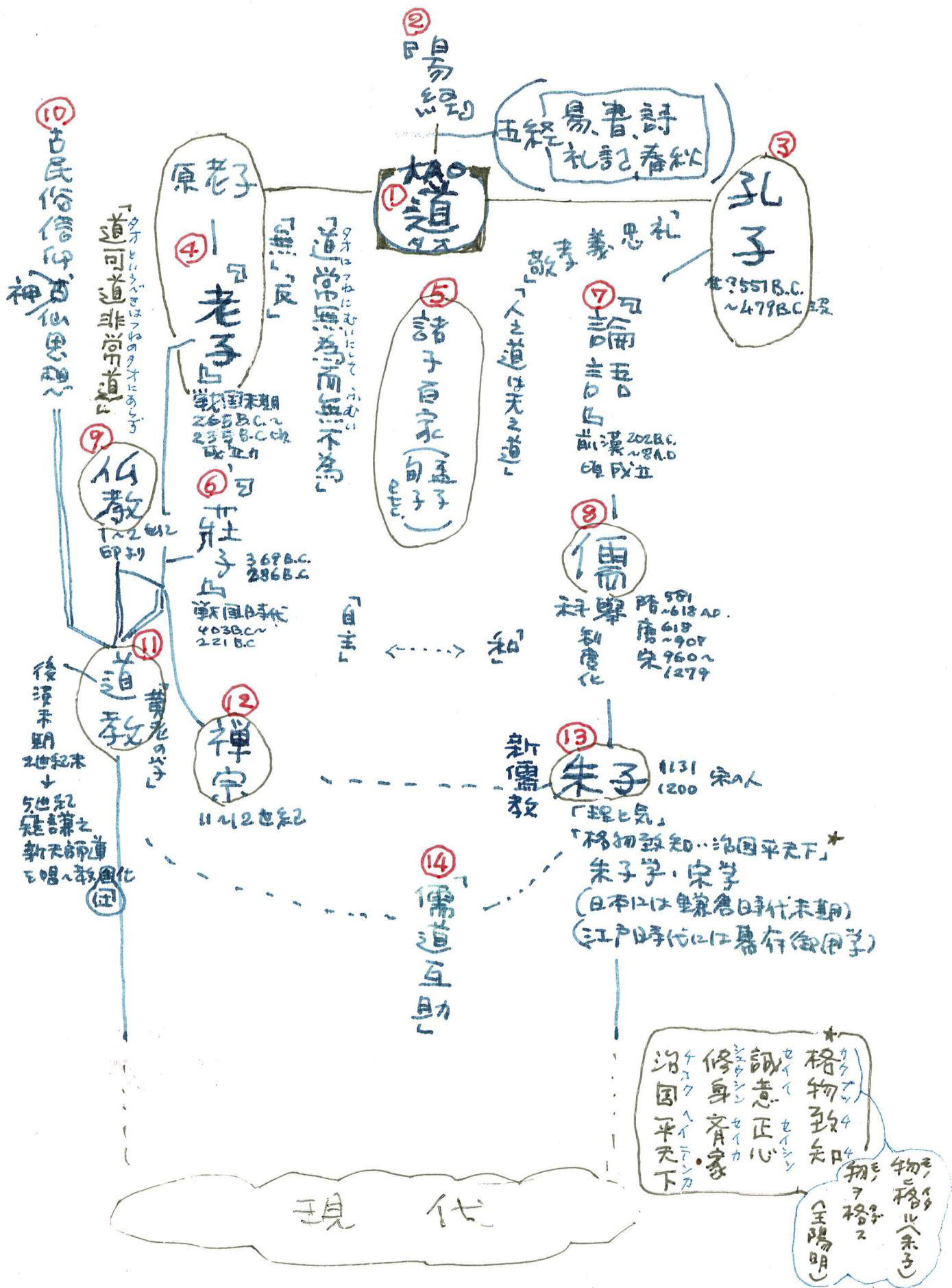


# 中国思想の展開略図



## 中国思想展開図メモ 註

①道（タオ）：孔子も老子も諸子百家も「道」を究極の概念として立てた。しかし、その語に籠めた意味はそれぞれ異なり、対立さえしている。例えば、孔子－儒家は「人間の生きる道、人倫」という意味で「道」を使っており、老子－道家は「宇宙の究極原理（者）」という意味で「道」を使っている。

孔子、老子に先立つ「道（タオ）」の思想は、古代中国思想の「易」（その他「五経」と言われる書物）にその源を持ち、さらに遠くから伝承があっただろう。

②『易経』は、現在では古いの經典のように見られているが、もともとは、宇宙・世界の成り立ちや行方を考える思想だった。

「易」の起源を遡ると、甲骨文字に見られる「文字の誕生」に辿り着く。「甲骨文字」は中国文字（「漢字」と俗に呼ぶ）の最古の姿であり、主として古いの手段として読まれた（書かれたのではなく、読まれた）。それは中国大陸における<無文字文化>が<文字文化>に変わろうとする転換過程の誌（しるし）である。初源的な占いは、世界・宇宙の行方を読み取ることがを任務とした。だんだん矮小化していった運勢占いの道具になっていったのだが、その初源の、甲骨文字に生きている<無文字文化>の世界観が「易」に集大成されている。

③ その集積（原「易」経）を、前5世紀、孔子が編集整備したのが、今日手にする『易経』であると言われている。孔子は、『易経』のほかに『書経』『詩経』『礼記』『春秋』（揃えて「五経」）を編集したと言われている。この「五経」は、中国古代思想の思想源と言っていい文献となっていく（「経」と名付けられる由縁）。孔子廟が中国本土にやたらと多いのは、孔子が五経の編者として中国文化思想の創始者と崇められるところにある（もちろんこれも作られた思想である）。

④『老子』もこの『易経』を源流の一つとしている（42章）。なにしろ『老子』は固有名詞を一切使わない書物なので、本文のどこが引用かもなかなか読み取り難いが、「五経」を源流にしている。『楚辞』なども底に流れているだろう。『老子』という書物がいつごろ誰によって編まれたか、まったく判らない。「老子」と呼ばれていた何人かの人物がいたことが『史記』（前漢、司馬遷筆）には誌されている。

現存する写本で最も古い『老子』は、紀元前200年代の竹簡で、その竹簡も写本と考えられるので、それより以前に成立していたと推定しなければならない。孔子がいた時代（春秋時代、前770～403）よりずっとのち、戦国時代（前403～221）末期に編集された『荀子』には老子の引用が見られないが、そのしばらくあとの『呂氏春秋』には言及されているので、竹簡の時代鑑定と合わせておよその成立時期をそのあたりと考えられているのが現状。

『老子』は現在、81章に分けられ、全部で5000語余り（写本によって文字数は前後する）の書物にまとめられている。紀元3世紀初めには、この形式に整えられていた。

さきに記したように、本文には一切、固有名詞は登場しない。きわめて抽象的な思考を要求される書物と言える。

全体を通して語られているメッセージは、世界・宇宙を形成する原理は「道（タオ）」であり、その「道（タオ）」は、「無」としか言いようのないありかたをしている（1章）。しかし、その「無」は「無為而無不為（ムイニシテムフイ）（37章）（無為＝なにもしていない、無不為＝なにもしないのではない＝なにかをしている）」。そして、われわれ人間は、「無」から生まれた「有」として地上に存在し、「道（タオ）」の理に従って生きている（生きて死んでいく）（1章）。

「無」という語は前漢のころ（紀元前後）までは、「豊かな」という意味で使われていた。それが「无」の意味を与えられて今日に至っている。また、「無」は「舞」「巫」「母」と同声である。

「道（タオ）」を動かしている原理（理法）は「反」である（40章）。「反」の働きは天下万物の一つひとつの動きに浸透している。「物」に「名」を付けるとき（「有」となるための最初の条件）にも「反」が働いている（1章）。「無」と「有」が「反」の関係にあるのは当然である（11章、1章）。そして、この「反」は、つねに「弱」なるものを大切にして機能している（40章）。一人ひとりの生きかたも国家社会のありかたもこの「道（タオ）」の理に従って行くのがいちばん良い…というところにある。（この考えに従うと、権力者は自分の地位に君臨謳歌することができない。前漢期に、この点はすでに露わになり、権力者から遠ざけられるようになった。）

『老子道德経』という呼称は、『老子』本文を二巻に分け、それぞれの巻頭に来る章に「道」「徳」の語があるところから呼び慣わされていったもので、「道德」を説く書という意味ではない。『道德経』という書名もずっとのちに定着させられたことを忘れないようにしたい。

⑤ 周末（前3世紀）から漢（前1世紀）にかけて、じつに多くの「学者」が出現し、自説を権力者に売り込んだ。それらを、陰陽系（鄒衍）、儒家系（孔子、孟子、荀子）、墨家系（墨子）、法家（管仲、申不害、商鞅、韓非子）、名家（慧施、公孫龍）、道家（老子、莊子、列子）、ほかに兵家系（孫子、呉氏）、縦横家（蘇秦、張儀）と分類し、「諸子百家」と呼んだ。漢時代にはこの呼称は使われていたようだが、すでに『老子』は「道家」のなかに含み込まれ、のちには「儒家」を特別扱いして「諸子百家」のなかから外す説も登場する。

⑥ 『老子』は本文のなかで暗に鋭く儒学を（儒学だけではないがとくに「儒」を念頭に）批判している（38章）。その『老子』の考えを引き継ぎ、華麗に饒舌に、しかし政治的色彩は抑えて、多くの逸話を盛りながら、老子の思想を脚色、開陳したのが『莊子』である。その語るころは、老子より脱俗的志向が濃い。よく読むと、老子より孔子を尊敬しているのではないかということが判る。莊子の相対主義は、一元的相対主義とでも名付けようか、結局個人は全体（国家、社会）の権力の前になす術もなく、その必要はないと説き、（権力者を批判することを回避して）内的自由を享受すればいいのだと説く。禅にもこの傾向が強い。老子の相対主義は相対的相対主義と呼ぼう。国家や社会の権力の暴走を相対化（抵抗あるいは無化）する術を説いている。

『老子』のすぐあと、『莊子』によって、「儒道互助」の動きは芽生え育てられていた。

⑦ 『論語』は、孔子の弟子（や孫弟子）たちが、師の遺した言葉を思い出して集めたもの。前漢（前202～後8）期に編集されたと考えられている。

⑧ こうして、「儒教」「儒学」が制度として確立していった。前漢期には、儒学が皇帝の政治

綱領を支える思想となって行く。科挙試験制度が確立され長年にわたり実施される。こうして「老子」が排除されて行く。しかし、科挙試験を通った宮廷人・士大夫が、勤めに倦むと隠居し、老荘思想に浸る生活をするなど、「老子」の考え、教えるところは魅力的で、多くの読者支持者が絶えることなく、「老子」を圧殺することは出来なかった。そこで、『老子』を儒教イデオロギーに沿うように解釈して行く読みかたが広がっていった。『老子』という書物は、数ある書物のなかの一つの道徳を説く書として位置づけ読もうとする方法が、2000年来続けられてきたのは、その結果である。

「老子」の根本思想は「無為自然」だという解釈など、好例である。「無為自然」という四字熟語は『老子』本文 81 章 5000 余語のどこにも記されていない。それなのに、2000 年に亘って「無為自然=老子思想」と信じられて来ている。「無為自然」は『老子』を『莊子』のオブラートで包み、儒教に対する鋭い批判を骨抜きにさせた解釈といえよう。じつは『莊子』では「無為自然」が使われていたのである。「無為自然」の勧めだけなら、そんな生きかたもよからうで読み終ることが出来る。「老子」が語ろうとしているのは、そんなことではない。もっと人間と世界全般に関わる問いである。どんなに権威ぶっている人間でも、しょせん万物の一つだ、どんなに惨めな貧しく見えるものにも、いやそう見えるからこそ、かえって偉大な存在なのだ、それを見つけなければならない、それを胆に命じようと言っているのが「道（タオ）」だ、「と。老子」はだから、ついに「老子」を信奉する人のなかから、孔子のように頂点に立つ指導者（宗匠）を作らなかった。宗匠を崇めて集団（宗派）を作らなかったことが、逆に儒教イデオロギーの解釈を許すことになったのも、確かだが。

⑨ そこへ、インドから入って来て中国本土に広がっていった仏教が、老荘思想と協力し合っ  
て、勢力をひろげていった。

⑩ さらに、老荘思想+仏教に加えて中国古来の民俗信仰・神仙信仰が結びつき総合され、

⑪ 「道教」が誕生した。（「黄老の学」と呼ばれた。「黄」は「黄帝」=古伝説の帝王「三帝五皇」の一人）。

唐第 6 代皇帝玄宗（げんそう 712~756 在位）は道教を国教とし（742）、莊子を「南華真人」  
「南華老仙」と名付けて崇拝した。『莊子』の書は「南華真経」と呼ばれた。

⑫ 禅宗は、こうした仏教の動き（分派活動）の中から、道教・老荘思想を吸収精選し仏法に  
添わせ、新しい仏教としての宗教体系を構築していく。

⑬ 儒学は、朱子の出現によって、新しい展開を遂げる。朱子は堅固な儒学思想体系を構築。  
科挙制度を支える権力の支配思想（宋学、新儒教と呼ばれる）となった。

⑭ 老荘思想は、この儒学イデオロギーと競合しない解釈を施され、知識人たちの隠遁思想と  
して、珍重されていく。ほぼ 2000 年、この解釈枠のなかで、老荘思想の元祖として『老子』  
は読まれて行った。江戸時代の日本の儒教は、この新儒教を継承している。清代には「儒道  
互助」という言葉が提唱され、老子は道教・道学の元祖として偶像化され、莊子と同一視さ  
れることはあっても、『老子』と『莊子』の相違点（道教とのちがいは言わずもがな）を見つ  
め、『老子』という書を読み直し、時代と情況へ、そのなかに生きる人間へ、問題を提起しよ  
うとする試みはなされなくなって、現代へ至ってしまったのだった。